

童謡

「赤い靴」の里

留寿都村教育委員会

はじめに

童謡「赤い靴」の里留寿都といわれているが、「赤い靴はいてた女の子」とどんな関わり合いがあったのか。

このことについての村の人々の理解の仕方は必ずしも一様ではない。よその人に聞かれた時、はっきりと答えられるようになるために、ここで手に入った資料をもとにして、その内容をまとめてみることにした。

野口雨情作詞、本居長世作曲のこの歌は、子どもの頃から聞き慣れ、その曲と詩から子ども心にいろいろな想像をして来たのであるが、その歌が今留寿都と大きな関わり合いを持つと知って、また、別な感慨を持つのであるが、歴史的により確かな事実を知りたいと願っている村の人々がいるのではないだろうか。その一人として、少し資料を漁って見たのである。

このことは、留寿都村の開拓の歴史にも大きく関わりがあり、「温故知新」という意味からも大切なことに思われるのである。

近代化された社会の中であって、毎日多忙にすごさざるを得ない私たちの生活にこの「赤い靴」の歌の話は、心に潤いと豊かさを感じさせるのではないだろうか。夢とロマンを求めいくことは、ほんとうに人の心を和ませるものがある。

童謡「赤い靴」の里、留寿都村が大きく羽ばたく一つの糧になればと思われるのである。

1. 「赤い靴」の解説

今、いろいろなものに童謡「赤い靴」の里として解説されているのは、次のようになっている。

「童謡『赤い靴』は、留寿都村に実在した女性をモデルに大正11年、詩人野口雨情が作詞、発表したものです。

物語は明治38年、父の名を言えぬ幼な娘を抱えた若き未婚の母が木枯らしに追われるように函館に流れ着いたことに始まります。

食べるものも住む家もない、生きるために開拓に入ろう、そこは留寿都村にある自由を求める農場でした。しかし、開拓暮らしにわずか二歳の幼な娘がついてゆけるはずがありません。

ぎりぎりの決心を迫られた母は泣き叫ぶわが娘をアメリカ人宣教師に託しました。

元気であるのか幸せなのか、開拓小屋で見る夢はわが娘のことばかり。

娘を案じる親心を秘めた「赤い靴」、その舞台が留寿都村であったのです。」

2. 「赤い靴はいてた女の子」は実在していた。

「あの女の子は姉なんです。いま頃はどこでどうしているやら。生きていたらひと目でもいい、逢いたいものです。」と「赤い靴」にうたわれている女の子の行方に想いをはせているおばあちゃん（岡そのさん）のつぶやきを聞いて、菊池寛氏はその「赤い靴はいてた女の子」に係わる資料を尋ね歩いた。

その結果、多くの人と逢い資料を探してその存在を確かめたのである。

「赤い靴はいてた女の子」は、静岡県不二見村（現清水市に合併されている）で、母岩崎かよの私生児として生まれ、名をきみといった。

その後、苦労に苦労を重ねたことは言うに及ばず、新たな生活を目指して、親子二人函館棧橋に流れ着いたのが明治38年、そこで偶然知り合った鈴木志郎氏とともに真狩村八ノ原番外地（現留寿都村字泉川）の平民社農場に入植したのであるが、その入植前に佐野安吉氏（きみの父親と思われる）によって、札幌の外人宣教師（ヒュエットさん）に養女に出すことになり、連れ去られた。

娘と別れた岩崎かよは、平民社農場に入ったが娘きみのことが心から離れず夢ばかりでなく、カマドの煙の中にさえ「きみ」の幻影を見た程だった。

その後の「きみ」の消息はわからず、外人宣教師（ヒュエットさん）は帰国したと思われる。

さらに、探した菊池氏は東京麻布の鳥井坂教会の共同墓地に発見した。埋葬者台帳には

佐野きみ 静岡県平民
明治44年9月15日死亡
死因 結核性腹膜炎
墓番号 2等12ノ22の3

「赤い靴はいてた女の子」は幸せ薄かった九歳の生涯を閉じていたのであった。これらのことは菊池寛著「赤い靴はいてた女の子」（現代評論社刊）から得られたものである。

この本の資料を得るための菊池氏の努力にはただただ敬意と尊敬の念を感じるばかりである。

3. 「赤い靴はいてた女の子」は留寿都には来なかった。

「赤い靴はいてた女の子」は、母岩崎かよと函館で別れた。きみは佐野安吉とともに、函館から札幌へ行き外人宣教師の養女となったのである。その後、鈴木志郎氏と岩崎かよは結婚して留寿都村の平民社農場へと開拓のために入植したのである。

当時の開拓は言うまでもなく、困難を極め小さな子どもを伴うなど考えられなかった。留寿都村ではきみの妹のぶが生まれたと言われている。

岡そのさんは、岩崎かよと鈴木志郎氏の間に生まれた。岡さんは母岩崎かよから、いろいろと話を聞いていて姉きみに逢いたいと思い、そのつぶやきが菊池寛氏の耳に入ったのであろう。

こんな伝説めいた実話は、その他にもきっと多くあるだろうが、その掘り起こしはほんとうに大切なことである。

童謡「赤い靴」の里留寿都といわれているが、実際には「赤い靴はいてた女の子」きみは、留寿都村に来てはいなかった。

しかし、きみを想いきみを案じたかよの心は、留寿都の開拓農場平民社にいた時が一番強かったと言えるし、その点から考えると、その心を詩にした野口雨情は、この時のかよの心情を詩にしたものであろうと思われる。

だから、童謡「赤い靴」の里と言われる所以であらう。

4. 平民社農場と「赤い靴はいてた女の子」

平民社農場は社会主義者である平民新聞の同志が、社会主義の伝導とユートピアの社会づくりを実現しようと、北海道にその地を求めて開拓に入った農場である。そのために平民新聞を発行していた平民社がバックアップしていたのはもちろん、函館・札幌・小樽などの都市の人達の中にも援助者がいたようである。しかし、この平民社農場の夢もわずか2年あまりで解散せざるを得なくなり、消え去ってしまったのである。

この平民社農場は留寿都村の泉川だったといわれている¹。平民社農場があったのは、明治38年4月から明治40年末までであった。その中にきみの母親、岩崎かよがおり、佐野安吉も弟の辰蔵も参加していたが、佐野安吉は途中で去り、弟辰蔵は病気のため亡くなっている。小池喜孝著「平民社農場の人々」（現代史出版社発行）によると、その開拓の困難さと生活の悲惨さがよくわかる。

その中で、別れたわが娘への愛情と思いが切々と伝わってくる「赤い靴」の童謡は、野口雨情が直接母岩崎かよからその話を聞いて作ったものであろう。

¹ 原文では個人宅名が記載されておりますが、個人情報のため割愛しています。

5. かよ夫妻と野口雨情の出会い

平民社農場は明治40年に入り経営は悪化する一方だった。前の年の火事がたり、極度の資金難に陥っていたのである。

「このままでは皆が飢え死にする。わしらはいったん札幌に出よう。」とかよ夫妻は、鈴木志郎氏が前に豊平館で働いたことがあったので、明治40年の春、平民社農場を後にした。

そして、早くから新聞記者になりたいという希望を持っていた鈴木氏は、とりあえず、北鳴新報社の事務に入社した。その北鳴新報社に志郎が入社して間もなく入社してきたのが、野口雨情であった。雨情は既に詩人としての才能を一部では認められていた頃である。

北鳴新報社で毎日顔を合わせ同じ頃の入社ということもあって、志郎と雨情は家族も交えた親しい間柄となった。そのうちに山鼻に大きな家を一軒借りて二家族で住み始めた。その頃の様子を菊池氏は次のように述べている。

「雨情の方は、妻のひろと、一歳になる長男雅夫の三人家族。志郎一家もかよと、平民社農場で生まれたのぶと三人。お互いに遠慮なく行き来し合った。家の庭にはリンゴの木が一本あった。花が散り、小さな実をつけると、雨情の妻ひろは、『早く食べてみたいわね』と、よくかよに話しかけた。

かよは育児のあまり得意でないひろが、雅夫のおしめを取り替える度四苦八苦しているのを見かねて、どれかしてごらんよ、と替わってやることもあった。かよは雨情の子も、わが子のぶと同様によく可愛がっていた。

そんなとき、かよはつい口にしてしまった。

「子供は可愛いねえ。私にはのぶのほかに、実はもう一人女の子を生んだんですよ。」

「へえー、ほんと。じゃ病気かなんかで亡くなったの。」

「いいえ、事情があって函館にいたときに養女に出したんです。」

「まあ」

「いまのうちの人の子ではないんです。それで再婚話が出たときに、養女の口があったものだから。」

「で、いまはどこにいるの。」

「さあ……。間に立ってくれた人、行き先は知らない方がお互いにいいだろうって……。ただわかっていることは、子供のいないアメリカ人宣教師の家に貰われたらしいってことだけなの。」

「まあ、異人さんの養女に。」

ひろからその話を聞いた雨情は、

「そうでやんしたか。辛かったでしょうなあ。」

とかよを慰めた。志郎も妻かよの胸のうちはよく知っていた。」

この出会い、そして、交流の中からやがて「赤い靴」の詩が生まれるのであった。

やがて、石川啄木とも新聞社を通じて仲間になったが、人事のことや新聞社の事情で、雨情とも啄木とも離れ離れになったのである。明治41年4月、志郎の勤めていた小樽日報社も経営が傾き印刷機が止まり、志郎も職を失った。

小樽日報が廃刊になってから、新聞社に働き口を探したが見つからず、再び志郎夫妻は平民社農場の近くに入植した。郵便配達をしながら畑を耕し、細々と暮らしていた。

大正2年、かよは開拓小屋でそのを生む。作物の出来が悪く、生活はいつそう苦しくなり、第一次大戦のときに、志郎は室蘭製鉄所に勤めを見つけ、再び離農した。その後、終戦とともに志郎はまた失職し、夕張の炭鉱にはいったのであるが、夕張も後にして樺太の豊原の教会の伝導師として赴任した。

ある時、かよは、

赤い靴はいてた 女の子 異人さんに つれられて 行っちゃった

子どもたちの歌う哀調を帯びた旋律を耳にした。かよはその歌声に忘れようとしても忘れられない、きみの面影を見ていた。

詩を作ったのは、新進童謡詩人として一躍脚光を浴びていた野口雨情であることを知った。雨情さんが、きみのことを詩にしてくれた。かよは、雨情の温かい気持ちを汲み取ることができた。

このようにして、赤い靴はいてた女の子の歌が生まれたといわれる。

6. 終わりに

漁った資料をかいつまんでまとめたが、ほんとうに菊池寛氏をはじめ、小池喜孝氏の気持ちの一部でも伝えることができたのか、大きな疑問を残しながらも、童謡「赤い靴」の里のいわれが判って貰えるならばと思い、まとめを終えることにするが、無断で菊池寛氏の「赤い靴はいてた女の子」小池喜孝氏の「平民社農場の人々」、記念誌「赤い靴」のふるさと清水からほとんど引用したことを、赤い靴の女の子「きみ」の冥福を祈ることでお許し下さることを願って、「赤い靴」の里、留寿都のいわれとなる資料といたします。

引用著書

菊池寛著『赤い靴はいてた女の子』 現代評論社刊

小池喜孝著『平民社農場の人々』 徳間書店刊

赤い靴の女の子・母子像建設委員会編 記念誌『赤い靴』のふるさと清水